

【屋久島民謡集】

山本秀雄

○一月七日の福祭文

祝つて申す (木戸祝)

恒例の門松 いつもより今年は

木戸の松が栄えた 栄えたも道理よ

東の方の枝には飛魚が下がって

西の方の枝にはうぐいすがとまって

うぐいすがめえに生えたる稲は

一株刈れば千石 二株刈れば二千石

そなたの宿を見わたしてみれば

米の俵千石 もみの俵二千石

祝つて申す

祝つて申す (船祝)

恒例のお船に白金柱おしたてて

黄金の滑車をくるませて

本帆にや綾錦 手綱荷縄ととのえて

宝一隻積みこんで

宝が島に打ち向けて思つ港にそよそよと

祝つて申す

祝つて申す (井戸祝)

恒例のお庭に井川を掘りて

水はくめども泉の涌が湧き候

白金びんに黄金のひしゃく
汲んでも汲んでもつきはせぬ
祝つて申す

祝つて申す

○子守唄

みたけすすだけ野は石楠花で

雪にせかれてたちかねる

みたけ白雪や朝日でとける

おごが島田は又寝てとける

屋久の御岳の七本杉よ

様は三杉でわしや四杉

屋久の御岳の石楠花よ

年中つぼんで一度咲す

○四ツ竹踊り (押しかけ節)

押しかけ節は永田がもとよ セノ

叶も向江も新町も

押しかけノイノイ船乗りや船頭船頭

永田出る時や涙で出たが セノ

鶴瀬廻れば歌でやる

押しかけノイノイ船乗りや船頭船頭

永田嫁じよは枯木の枝よ セノ

登る登るとおそろしや

押しかけノイノイ船乗りや船頭船頭

○笠おどり (踊りは女だけ)

笠を忘れた駿河屋の茶屋に

空が曇れば気にかかる

トコヨイヨイヤナハレワイナトコセー

五反畑の真ん中ほごで

こまい乙女が青菜つむ 離子

こまいこまいとおなぶりめすな

こまい小川にや瀬瀬がござる 離子

音頭とる子が橋から落ちて

落ちたその子が又音頭とる 離子

雨は降る降る干物は濡れる

背中子は泣く飯やたざる 離子

今度長崎あかねやどのが

家の御用とる海老屋の甚句 離子

親の代から細物売りで

今は細物売りをやめて 離子

大阪通いのいともんだてよ

船は七反九反の新造 離子

手縄身縄の真紅の糸よ 離子

今日は日もよし 日柄もよいが

目次

福祭文

子守唄

四ツ竹踊り

笠おどり

甚句

松坂節

押船競争

扇子踊り

大漁節

御田んぼさんさ節

祝儀歌

よいこん節

まつばんだ

如竹踊り

船唄

屋久島民謡集について

鹿児島市にお住まいの黒木林さんという方が、昭和二十五年頃採集された「屋久島民謡集」というを拝見する機会があり、早速、本紙掲載をお願いしたところ心よくご諒承をいただいたので、ご紹介する次第である。先ずは黒木さんに感謝とお礼を申し上げます。

屋久島は古来、歌舞演劇が盛んに行われた島であったと云うが、最近生活様式のさま変わり、また、音楽の都市化と相俟って、伝承の場であつた村祭り等の年中行事も薄れ、伝統芸能は消滅の危機に至つている。私も屋久島の民謡をたずねて、折目式目に歌詞等調べて来たが、近年は最も一般的な山祭りの木挽唄、大漁祭りの舟唄、正月の祝慶歌、子守唄までも唄われず聞取り調査も出来ない始末で困つている。

寛政年間の本に「屋久島記」というがあるが、島の浄瑠璃狂言にもふれて、二才衆の演じた「御所桜堀川夜討」の役どころを面白く評しており、興業も三日間であつたこと、また芝居小屋ばかりか囃子音頭につきものの鳴物、三味線も手づくりであつたようだ。旧家の床の間に箱三味線を見ることがある。殊に芝居狂言の台本は昭和五十年頃まではよく見掛けた、私のメモに江戸末期の文久二年本が宮之浦に、大正三年台本を楠川にと記しているが、この稿を書くに当って調べたがいずれも所在は不明であつた。

末筆になつたがこの民謡集は、黒木さんが戦後の昭和二十五年〜二十七年の二カ年を、熊毛市庁、屋久島連絡事務所勤務された折、屋久島によく唄われていたものを専ら宴席で採集したもの由である。方言で唄われると文字に出来ず誤・脱字の多いことも話されたが、その点、私も同様で、紹介はするものの字足らず、字余りをどう正調に乗せるかわからないまま、原本に従つて再録したが、歌章の不備も土地柄とご理解頂ければ幸甚である。

なお字句に明らかな誤字のみ一部改めているを付記しておきます。今は消滅に近い貴重な資料、民謡の数々を掲載させて頂き重ねてお礼を申し上げます。

船を出しませ 楫取りおやじ 囃子
おんぼ巻きあげ滑車ロしやんと

風もよいよい穴瀬の風よ 囃子

穴瀬好むは播磨の灘よ

播磨灘をば走り抜けました 囃子

ここは何処よと船頭衆に問えば

ここは一の谷敦盛様の大ださんした

熊谷殿よ おはか所で皆手を合わす

ここは橋ぬき兵庫の前

兵庫の前をば走り抜きました

ここはどこよと火夫衆に問えば

ここは大阪川口筋よ 伝馬おろして

本帆おろして錨をつけて

やお帆おろしててんまをおろす

そこで陸にと端綱を取りて

そこで甚九郎は陸にと上がる

十二月には借金取りが門に立つ
立たれて私はノホホイエー腹が立つ
ドスコイドスコイ

○松坂節

一 松坂越えて坂越えて
向うの小山に鳴く鹿は

寒さに鳴くかよ妻よぶか

寒さに鳴かぬ妻よばぬ

明日はお山に狩がある

まぶしまぶしにや狩人が

赤白黒が追い廻る

この身一人は逃れもするが

あとに残りしこの子が可愛い

どうして逃がりようか

助けてたもれよ山の神

○甚句

一 正月はどこも門に門松 木戸に松

(囃子)山伏やホラ吹く 鯨は汐吹く
知らん者は黙つとれ黙つとれ

一 二月は初午旗が立つ

三月節句にやひなが立つ

四月八日にや釈迦が立つ

五月五日にや幟立つ

六月祇園で夜灯笼が立つ

七月七夕笹が立つ

八、九、十月風にもまれてホコリ立つ

十一月となりぬれば天長節に国旗立つ

○押船競争

一 川の流れもよき様に
右大臣左大臣ここに止まり

流れる水の音 船先ここに止まり
カイシの所に候なり

○扇子踊り

一 沖には鳥まき中海は出魚

へたのヌゼン瀬には雑魚ばかり

一 船は見たが様じよは見えぬ

